

蘇州句容洞天福地調査記録 廣瀬直記

はじめに

3/18 (月) 蘇州市 (合流)
3/19 (火) 蘇州市→西山 (林屋洞)→穹窿山 (上真觀)→蘇州市
3/20 (水) 蘇州市 (蘇州市博物館)→句容市
3/21 (木) 句容市→茅山 (崇禧万寿宮→元符万寧宮→華陽洞→仙人洞 →玉晨觀遺址)→句容市
3/22 (金) 句容市→茅山 (乾元觀→老君洞→三官洞→柏子洞→良常山 →老虎洞)→句容市
3/23 (土) 句容市 (葛仙觀→華陽書院)→茅山 (金牛洞→茅洞→元陽觀) →句容市→南京市

3/24 (日) 南京市

3/25 (月) 南京市 (南京大学仙林校区ミニシンポジウム)

3/26 (火) 南京市 (解散)

筆者は2013年3月18日から26日まで、専修大学の土屋昌明教授を代表とする洞天福地調査隊に参加する機会に恵まれた。上の表は、筆者が同行した全日程であり、本稿ではそのうち枠で囲った部分について、調査記録を作成した。まず、この調査記録の構成について簡単に説明しておきたいと思う。

- ・一日ごとにタイムテーブルを作成したが、これがこの調査記録の最も基本的な部分である。ここから写真、地図、解説に移動できるように参照を付けてある。なお、時刻は15分刻みで表示している。
- ・写真については、一部、筆者が2012年8月末に茅山を訪れた際に撮影したものも含まれているが、それについては必ずそのことを注記している。とくに注記のないものは、すべて今回の調査中に撮影したものである。
- ・この調査記録では、文献の記述だけからではつかみにくい地理的な感覚を伝えたいと思い、地図を付すことにした。地図については、すべてグーグルの地図を利用させていただいた。本来は、もっと地図を多用するつもりだった

が、筆者に利用できる適当地図がグーグルマップしかなく、それであればネット上で参照できるので、最終的に枚数を減らした。また、なるべく余分な情報の少ない地図を利用し、そこに筆者が提供したい情報を自分で書き込んだ。なお、地図1は冒頭に、地図2～4は末尾に付してある。

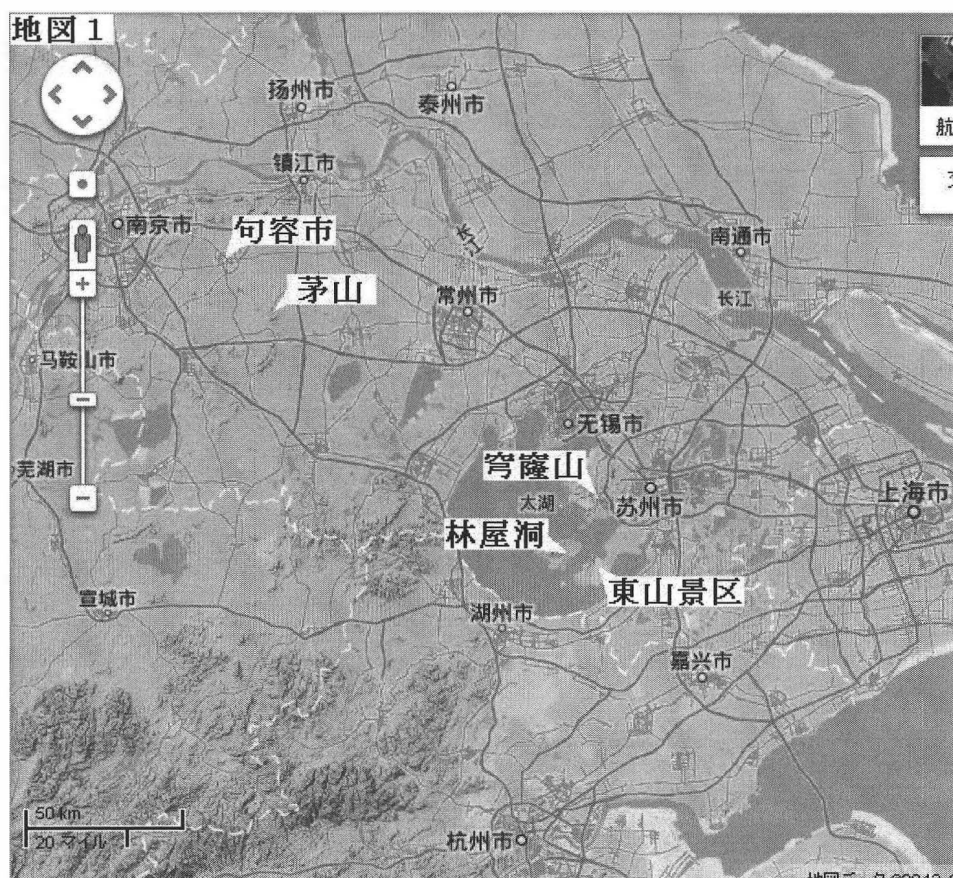
- ・解説には、調査のようす、筆者の感想、調査地についての簡単な紹介、調査地と文献資料との照合作業の結果などを記しておいた。また、できる限り解説の文章が写真と地図に関連するように気を付けたつもりである。
- ・林屋洞に関しては、横手裕「洞庭包山林屋洞」（『洞天福地研究』第二号）に、茅山の元符万寧宮と華陽洞、仙人洞、玉晨観、乾元観、金牛洞に関しては、土屋昌明「第八大洞天句曲山洞の現況と考察」（同上、第三号）に、より周到な考察がなされているので、あわせて参照していただきたい。今回の調査記録では、内容の重複を意図して避けた部分もあるが、同じ場所を調査したということで、結果的に重複した部分もある。
- ・3/19（火）から3/23（土）までの調査参加者は、土屋昌明氏、森瑞枝氏、鈴木健郎氏、酒井規史氏、廣瀬直記の五名である。

1. 3/19(火) の調査

09:30	晴れ。タクシーに乗って蘇州市街を出発。太湖のほとりに出る。
10:15	太湖の上には霧がかかっており、遠くまでは見渡せなかったが、海岸線のように続く道を走りながら太湖の大きさを感じた。
10:45	全長約4kmの太湖大橋を渡り、太湖最大の島、西山島金庭鎮に入る。
11:00	林屋洞景区（※地図1）に到着。景区はよく整備されており、観光客で賑わっているようす。売店で『太湖西山』などの本を購入。
11:15	林屋洞（※1-1、写真1）入口に到着。
12:00	林屋洞を出る。出口周辺には数点の摩崖石刻がある。 ¹⁾
12:15	林屋山（※写真2）を登る。足下には梅林が広がり、少し目を上げれば、白く霞んだ太湖が見渡せる。
12:30	山頂の霊祐観（※写真3）に到着。

注1…李洲芳（一九九六）三二～三七頁、横手（二〇一二）七九頁を参照。

13:00	林屋洞景区を出る。タクシーに乗って東山景区（※地図1）に向かう。
14:00	東山観光センターに到着。街道には茶葉を売る店が軒を連ねている。ここは碧螺春という有名なお茶の産地でもある。昼食。
14:45	大粒の雨が降り始める。予定を急遽変更し、穹窿山に行くことにする。
15:30	穹窿山（※地図1）に到着。観光センターで傘を借りる。
15:45	上真観（※1-2、写真4）に到着。
16:30	景区バスの最終便に乗って穹窿山を下り、タクシーに乗って蘇州市街へ戻る。



1-1. 林屋洞

林屋洞は、林屋山というカルスト地形の丘陵の下にある。入口付近のごつごつとした石灰岩の壁には、「天下第九洞天」や「僊府」などの文字が刻まれている。

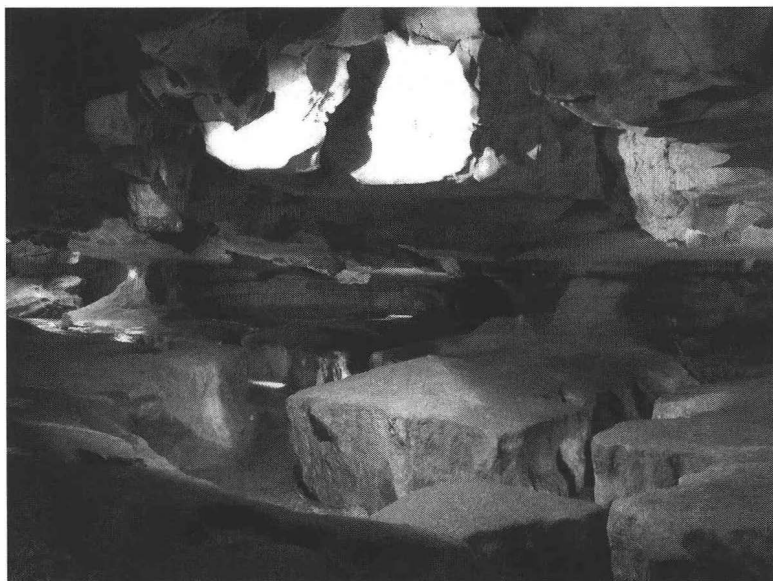


写真1 林屋洞

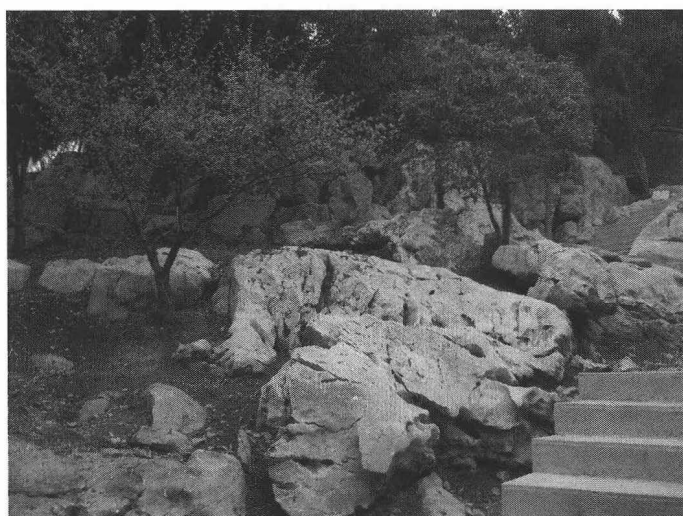


写真2 林屋山



写真3 靈祐観

注2…横手（二〇一二）
七六頁に写真がある。

注3…李洲芳（一九九六）
二三頁。

注4…靈祐観の歴史につ
いては、横手（二〇一二）
七三～七四頁を参照。

洞口は、景区の敷地よりも一段低い場所にあり、左右に大きく開けている。^{*2}
案内板によると、洞窟内には隔凡洞、天后別宮洞、金龍洞、丙洞、陽谷洞の五
つのエリアがある。各エリアは地下室のような空間的広がりを持っており、そ
こに巨大な石が林立している。『太湖西山』の記述によると、林屋洞の「林屋」
という名は、「頂平如屋、立石如林」という洞窟内の形状から取られたものだ
という。^{*3}

林屋山山頂の靈祐観^{*4}は、小規模であるが、道士もいる。二〇〇五年九月

に復興されたものだという。⁵ 中心には、駕浮閣という三層五階の楼閣があり、その第一層目（二階部分）には「三清閣」と書いた扁額が掛かっている。その下をくぐってなかに入ると、一段低くなった一階部分に三清像などが祀られている。また、楼閣のそばには小さな請香場があり、「蘇州市吳中区道教教会太湖西山林屋洞靈祐観管理委員会」という縦書の札が掛かっている。

注 5… 蘇州吳中区道協
(二〇〇五) 六三頁を参照。

1-2. 穹窿山上真観（※地図1）

穹窿山は、十大洞天でも三十六洞天でも七十二福地でもないが、今回の調査でたまたま訪れる機会を得た。高さは 341.7m。林屋山に比べれば、山らしい山だと言える。ここは孫武が『孫子兵法』を著わした地であるとも言われ、孫武文化園や孫武書院、孫武苑などの施設が点在し、整備された観光地となっている。ただ、我々一行には、孫武関係の施設を回る時間的余裕はなく、急いで景区バスに乗り、上真観へ向かった。

写真4 上真観



上真観は正一派の道観である。規模は大きく、道士もいる。現在の建物は、たいへん真新しく見たが、この地における信仰の歴史は、かなり古くに遡るようであり、山門には「皇清勅建上真観」という扁額が掛かっていた。その下をくぐって、長い階段を一直線に登ると、大きな殿宇があり、そこに三茅君が祀られている。解説のパネルを見ると、「茅盈、茅固、茅衷の三兄弟は、穹窿山で修行した後、茅山に移って得道昇仙したのだ」と書いてある。

しかし、『雲笈七籤』巻一〇四「太元真人東嶽上卿司命真君伝」と『茅山志』巻五「三神紀」における三茅君の伝記を見る限り、彼らが穹窿山で修行したという記述はない。「太元真人東嶽上卿司命真君伝」によると、茅盈（後の大茅君）

写真5 上真観の大茅君像

注6…この三兄弟が再会するくだりには、「以漢元帝永光五年三月六日渡江、求兄於東山、遂與相見」（『雲笈七籤』巻一〇四16a）とある。この東山が現在の東山景区の東山であれば、地理的には穹窿山に比較的近いと言えるが、『穹窿山志』を見る限り、このエピソードがとくに重視されているわけではないようである。



注7…余方爲童子、侍先君子游。何幸于朝眞遇之（※之＝施亮生）。時蓋庚寅春日也。先君子輒然笑曰、吾道樂得其朋矣。因中丞公與亮生、放艇河曲、遍歷山阿。見有三峰挿天、嶙峋特起、諸山如拱如伏、咸出其下。先君子曰、異哉此山、靈氣隱隱隆隆、若有神物護之者。然是名穹窿山。則三茅眞君之行宮在焉。此山世傳爲赤松子採赤石脂處、先祖留侯、從赤松子遊。是耶非耶。山之巔疊石爲室、名國師龕。

注8…穹窿嘗漢之初平年間、建有上眞觀。此時眞君尚未生。而上眞觀之建于此山、蓋千餘年于茲矣。太玄元君・定録二君・保命三君兄弟、同生於後漢之建武十年甲午歲。元君以童眞成道。兩弟以孝廉舉高職、棄家捨族、同往修煉、遂證眞君之位。寶誥中所稱隱恒山而悟道、登句曲以昇天者此也。眞君授東嶽之職、掌中界之權。後之人、遂以穹窿（廟）〔祠？〕（是）〔祀〕眞君。上眞觀之名、因之不改、所從來者久矣。※〔 〕内は実物の石碑による。

は恒山、西城山、亀山で修行した後に句曲山（茅山）に入ったようであり、また弟の茅固（後の中茅君）と茅衷（後の小茅君）は官途に就いていたが、後に得道した兄を慕って家を出たのである。^{*6}

ただ、穹窿山における茅君信仰の歴史は、少なくとも清初以前には遡るようである。『穹窿山志』（清・呉偉業等撰）には、穹窿山上真観に関する碑文が多く収められており、そのほとんどにおいて三茅君に関する記述が見られる。いまここで、それらすべてに目を通す余裕はないが、とくに順治十七年（一六六〇）の襲封嗣漢五十三代天師大真人張洪任撰「穹窿山上真観碑記」には、清初に上真観が復興された直接的な経緯が記されており、比較的重要なものと思われる。概要は以下の通りである。

順治七年（一六五〇）の春、張洪任は先君子（五十二代天師張応京）に付き従い、道士の施亮生と大中丞の呉晋錫とともに山河をめぐった。そのとき、ひときわ高く、靈氣に満ちた山が見えたのであるが、それが穹窿山である。そこには三茅眞君の行宮があった。また、言い伝えによると、穹窿山は先祖の留侯（張良）が赤松子に付き従って遊んだ場所とされ、山の巔には国師龕なるものもあった。^{*7}

穹窿山では、漢の初平年間（一九〇～一九三）〔※初元年間（前四八～前四四）の誤りか？〕に上真観が建てられたが、それは三茅眞君が生まれる以前のことである。茅氏兄弟は後漢の建武十年（三四年）に生まれた。後に、彼らが得道して眞君の位に就くと、後世の人々は穹窿山に三茅眞君を祀るようになったが、上真観という名は〔三茅眞君を祀る場所として〕そのまま使われ続けた。^{*8}

張洪任らが穹窿山を訪れた順治七年の春には、茅君廟はたいへん零落しており、先君子が明かりを灯して三茅真君にお香を捧げたいと思ったが、それもできないほどだった。そこで、呉晋錫は道士の施亮生に廟の復興を委ねることとし、ともに三茅真君の前に誓いを立てたのである。^{*9}

それから十年後、張洪任が朝廷に参上する道すがら、再び穹窿山を訪れ

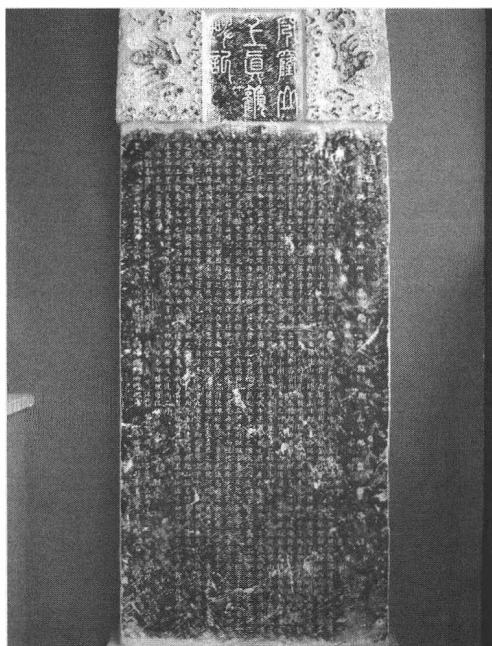


写真6 張洪任撰「穹窿山上真觀碑記」

たところ、見事に復興が成し遂げられていた。そこで、張洪任は朝廷に扁額を請うて、「上真觀」と名づけ初心を忘れないようにした。^{*10}

張洪任の記述には、上真觀が三茅真君よりも以前に存在していたという主張^{*11}とともに、『雲笈七籤』や『茅山志』に見える「茅君伝」に比べて、茅君の生年を大幅に引き下げるなどの作為(?)が見られるが、いずれにせよ、この記述から少なくとも、彼らが順治七年の春に穹窿山を訪れた時点で、酷く零落していたものの、その地に茅君信仰が存在していたことが確かめられる。

なお、『穹窿山志』に収められている碑文には、茅君信仰の歴史を漢代にまで遡らせているものが多いが^{*12}、実際のところ、その信仰がいつごろ興起したのかについては、さらに多くの資料を精査してみる必要があるだろう。

ところで、さきほどの碑文に登場した施亮生(道淵)は、現在、上真觀の祖師殿において開山祖師として祀られている。しかも、祖師殿にはその碑文を含め、複数の石碑が展示されていた。以下に列記しておきたいと思う。^{*13}

1. 「穹窿山上真觀碑記」順治十七年、(襲封嗣漢五十三代天師大真人張洪任撰)^{*14}
2. 「穹窿山上真觀碑記」順治辛丑、余廉徵撰
3. 「穹窿山上真觀碑」康熙元年、王元晋撰

注9…猶記、先君子偕中丞公與亮生登臨時、適當廟貌中落、止存敗壁頽垣、孤立于風雨飄搖淒淒荒草之中。欲求篝燈焚膏、進辨香于真君之前、不可得。中丞公奮然起曰、嗟乎真君之爲靈昭昭也、今何有乎。將使山靈果無靈乎、吾道竟無靈乎、而禮祀遂(中)[終]絶乎。是(任)[在]人耳。斯事請以屬亮生。亮生曰唯唯。相與共盟于真君之前而別。

注10…余入觀、道經吳門、再過朝真、重訪穹窿。自庚寅至今、曾幾何時、瓊宮輝煌于天際、瑤闕陸離于雲表。真君之廟貌、何頓改舊觀也。……而亮生再造之功、與此山竝不朽矣。余將請額于朝、仍名曰上真觀、志不忘初也。

注11…順治十七年(一六六〇)の宋実類「穹窿山上真觀記」には「山上有三茅峰、爲真君顯化之所、因有上真觀以祀焉」とあり、張洪任の主張とはやや異なる。

注12…たとえば、清の王元晋「穹窿山上真觀碑」に「漢初平中、建有上真觀、祠三茅真君」とある。

注13…1～5については『穹窿山志』にも収められているが、『穹窿山志』では年号などの重要な情報が一部省略されている場合があった。

注14…()内は『穹窿山志』によって補った。

4. 「穹窿山重建上真觀碑記」康熙三年、金之俊撰
5. 「重建茅君殿記」乾隆五十四年、潘奕雋撰
6. 「奉憲優穹窿山上真觀齋糧田差徭碑記」康熙十八年

2. 3/20（水）の調査

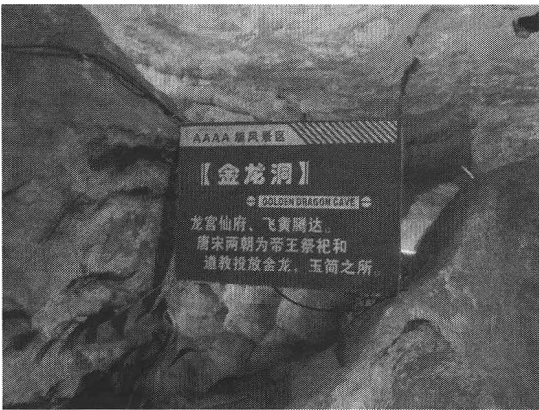
09:15	薄曇り。タクシーに乗って蘇州博物館に向かう。
09:30	蘇州博物館に到着。林屋洞から出土した投龍簡の遺物（※2-1）を見る。
11:30	蘇州博物館を出る。拙政園を觀賞。
12:30	昼食後、ホテルに戻る。
13:00	タクシーに乗り、句容市（※地図1）に向けて出発。
15:30	句容市街のホテルに到着。

2-1. 蘇州博物館蔵林屋洞出土道教遺物

程義等「蘇州林屋洞出土道教遺物」によると、一九八二年に林屋洞の改修工事を行なった際、洞窟内から梁代の石碑、五代の神像、金龍、玉簡、陶磁器などの遺物が出土し、そのうち金龍・玉簡・金鈕については、唐代から宋代にかけて行なわれた投龍簡^{*15}の遺物だという^{*16}。具体的には、以下のものが列挙されている。

金龍・・・四体
 鑲金（金メッキ）銅龍・・・二体

写真7 林屋洞の金龍洞



注 15…投龍簡とは、道教儀式の一環であり、儀式において祈願する内容を記した簡と、それを伝達する龍および真心を証明する金鈕を添えて、神聖な場所に投げ入れるという行為である。『道教事典』（四六四頁、福井文雅署名）を参照。

注 16…『太湖西山』には「一九七九年から一九八〇年にかけて相次いで出土した」と書いてある（二七頁）。

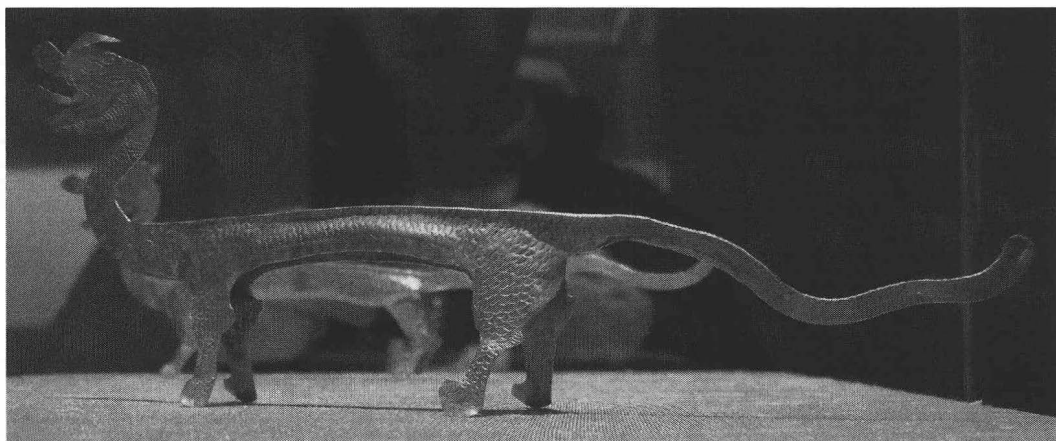
銅龍・・・二体
 金鈕・・・三つ
 玉簡・・・三枚

以上の遺物は現在、いずれも蘇州博物館に収蔵されているそうであるが、我々

が訪れた際に展示されていたのは、金龍二体と鑒金銅龍二体のみである。パネルには、いずれも唐代のものだと表示されていた。この年代がどのように推定されたのかはわからないが、北宋の朱長文『呉郡図經続記』巻中「宮觀」に「靈祐觀は洞庭山にある。唐代の神景宮である。玄宗の時代に建てられたものだろう。そのなかには林屋洞があり、世間では第九洞天とされている。……中略……唐代には、ここに龍を投じた。そこで、神景宮を建てたのである」¹⁷とあるのによれば、林屋洞では唐代から投龍簡が行なわれていたようである。

一方、程義「宋真宗天禧二年林屋洞道教投龍遺物簡介」と陳小三「蘇州林屋

写真8 蘇州市博物館に展示されていた金龍



洞出土玉簡銘文初探」によると、三枚の玉簡のうち一枚には、北宋の真宗の名と天（禧）二年（一〇一八年）の年号が記されており、それが当時の金籙齋において用いられたものであることが確かめられるという。さらに程氏は、金龍のうちの一体（展示されていないもの）と金鈕三つも、この玉簡とともに用いられたものだとしている。

写真9 蘇州市博物館に展示されていた鑒金銅龍

3. 3/21（木）の調査

注17…靈祐觀在洞庭山。唐之神景宮也。蓋明皇時建。內有林屋洞、人間第九洞天也。……中略……唐時投龍於此、因建宮。（『呉郡図經続記』巻中）

注 18…<http://www.msdy.org/djxw/279.html> (2013年4月30日)

注 19…<http://www.msdy.org/djxw/263.html> (2013年4月30日)

09:00	晴れ。句容市街からタクシーに乗って茅山景区へ向かう。
09:45	崇禧万寿宮（※3-1、地図3）に到着。茅山道院事務局の趙華氏の出迎えを受け、本日の案内人として茅山道院の潘一徳副道長を紹介していただく。潘副道長は『茅山道教志』の著者の一人であり、茅山道教文化研究中心研究室主任でもある。
10:15	潘副道長の案内により、元符万寧宮（※3-2、地図3）を見学。宋代の井戸や清代の壁など古いものを中心に紹介していただく。
10:45	華陽洞、仙人洞（※3-3、地図3）を見学。
11:30	崇禧万寿宮に戻り、潘副道長のお話を伺う。
12:00	茅山道院の車に乗って山麓へ行き、道長の楊世華氏らとともに会食。そのような、茅山道院のウェブサイトに掲載されている ¹⁸ 。また、このとき茅山道院の研究員陶金氏 ¹⁹ から、茅山の詳細な電子地図を提供していただく。この電子地図は、後日たいへん役に立った。
14:00	茅山道院の車に乗って、良常山を探しに行く。今回の調査では、三十六洞天の一つでもある良常山の正確な位置を確認することを主要目的の一つとしていた。しかし、良常山は一般の地図には載っておらず、また潘副道長も運転手も行ったことがなく、正確な位置はよくわからない、と言う。そこでひとまず、玉晨観遺址へ向かうことにする。
14:15	玉晨観遺址（※3-4、地図4）に到着。
14:45	玉晨観遺址を後にして、改めて良常山（※地図2、地図4）を探しに行く。運転手が地元の住民に聞いて回ってくれるが、よくわからないという反応ばかりである。運転手が当たりを付けた場所で車を降り、辺りを散策してみるが、けっきょく何も手がかりはつかめず。
16:00	時間も遅くなり、手がかりもないため、調査を打ち切ることにする。後日、改めて地図と写真で確認してみたところ、このとき一行は、珠山（※地図4）の西側の辺りをさまよっていたものと思われる。

3-1. 崇禧万寿宮（※地図3）

崇禧万寿宮は、積金山（※地図2）の南西の麓に建っている。現在、茅山では道観の再建が急速に進められており、崇禧万寿宮もその一つである。筆者

が2012年8月末に茅山を訪れた際には、まだ地ならし中のようなだったが、2013年3月21日の時点では、すでに多くの建物が出来上がっており、竣工まであと一歩という印象を受けた。また、茅山道院の事務局は、早くもここに移転してきているようである。茅山道院道長の楊世華氏と副道長の潘一徳氏からいただいた名刺を、いま改めて見てみると、崇禧万寿宮がその住所になっている。今後はここが茅山道院の本部となるものと思われる。なお、『茅山道教志』によると、崇禧万寿宮の遺址は、一九六六年に東進水庫（※地図3）を作った際に水没したとされているので^{*20}、現在の崇禧万寿宮は元の場所の少し東側に再建されたものだと言える。

崇禧万寿宮の来歴については、元代の『茅山志』巻一七「楼観部篇」にまとまった記載がある。

崇禧万寿宮は丁公山の前にある。〔古くは〕陶弘景の華陽下館だった。唐の貞観九年（六三五）には、太宗が王遠知のためにそこに太平観を建てた。また天宝七年（七四八）には、玄宗の勅命により、李含光が付近の住民百戸を召し上げ、租税と労役を免じる代わりに、長らく道観の修復と整備に当たらせた。中和年間（八八一～八八五）には、盗賊の放った火によって焼けてしまったが、天祐年間（九〇四～九一九）に、鄧啓遐が道観を再建した。そして、宋代になると改めて崇禧観という扁額を賜わった。……〔その後、更なる焼失と再建を経て、〕元の延祐六年（一三一九）に、勅命を奉じて宮に改められた。^{*21}

これによると、華陽館の下館の跡地に代々道観が建てられ、それが最終的に崇禧万寿宮と呼ばれるようになったようである^{*22}。華陽館とは、陶弘景が永明十年（四九二）に茅山に隠居して、最初に住んだ場所である。唐の王懸河『上清道類事相』に引く『登真隱訣』には「大茅山の西側に華陽上下二館を立てた」^{*23}と、また唐の賈嵩^{*24}『華陽隱居内伝』にも「陶先生は、はじめ大茅山と中茅山の間に積金嶺があって、その場所は上道を修めるのによいと考えた。〈……中略……〉そこで、嶺西に華陽上下館を立てた。〈『登真隱訣』には、上館は心を研ぎ澄ませる場所であり、下館は丹薬を鍊る場所である、と言う〉」^{*25}と見える。『上清道類事相』と『華陽隱居内伝』では、華陽館は「大茅山の西側」あるいは「積金山の西嶺」にあったと言われており、やや漠然としているが、もし『茅山志』の記述を信頼してよいのであれば、華陽館の下館の跡地についても現在の東進水庫の底に眠っているものと考えられるだろう。

注 20… 楊世華／潘一徳（二〇〇七）一二三頁。

注 21… 崇禧萬壽宮、在丁公山前。隱居華陽下館。唐貞觀九年、太宗爲王法主建、號太平觀。天寶七年、玄宗勅李玄靜取側近百姓一百戸、並免租稅科徭、長充修葺洒掃。中和間、盜火所焚。天祐間、鄧啓遐重建。宋改賜崇禧觀額。……延祐六年、奉勅改宮。（『茅山志』「樓観部篇」巻一七 1 b～2 a）

注 22… 『茅山志』巻四「誥副墨」の「勅賜崇禧万寿宮」には「瞻曲林之舊館、實弘景之故居」（2 1 a）、巻二七「録金石篇」の「崇禧万寿宮記」には「今之崇禧観、隱居之曲林館也」（4 b）とある。これらによれば、崇禧万寿宮は陶弘景の曲林館の故地に位置するという。曲林館については、『華陽陶隱居集』巻下に陶弘景撰とされる「茅山曲林館銘」が収められているが、ごく短い文章であるため、曲林館がどのような道館であり、どこに位置していたのかはよくわからない。しかし、『茅山志』巻一七「樓観部篇」と巻四「勅賜崇禧万寿宮」、巻二七「崇禧万寿宮記」の記述をすり合わせて読む限り、曲林館とは華陽下館のことだったのではないかと推測される。ただ、これらはあくまで後世の資料であり、曲林館に関する記述が何にもとづいているのかをさらに明らかにする必要がある。

注 23… 登真隱訣云、大茅山西立華陽上下二館。（『上清道類事相』巻一 4 a）

注 24…筆者は以前、『登真隱訣』訳注稿(一)において「北宋の賈嵩『華陽隱居内伝』」(九頁)と書いたことがあるが、賈嵩は、やはりストリックマン氏の言うように、唐代の人物と考えるべきだろう。Strickmann 1979, p.142.

注 25…初先生以、大茅中茅間有積金嶺、其地可修上道、〈……中略……〉乃於嶺西立華陽上下館。〈登真隱訣云、上館以研虛守眞、下館以鍊丹治藥〉。(『華陽陶隱居内伝』巻中1 a) ※ 〈 〉内は注文を表わす。以下、同じ。

注 26…楊世華／潘一德(二〇〇七)一一五～一二〇頁。

注 27…本稿注 25 を参照。

注 28…大茅山中茅山相連。長阿中有連石。古時名爲積金山。……〈此即隱居今所住東面一橫壑也〉(『真誥』巻一一10 a～b)

注 29…華陽宮、在積金山西隱居上館。天寶七年三月、玄宗從玄靜先生受上清經籙、勅度道士焚修、後燬于兵。宋政和中、道正莊慎質重建。隱居丹井樓基在焉。(『茅山志』巻一七「樓觀部篇」4 a) 陶真人丹井、在華陽上館前石橋之東。(『茅山志』巻八4 b)

注 30…楊世華／潘一德(二〇〇七)一二五頁。



写真10 三天門
と太上老君像
(2012年8月末)

3-2. 元符万寧宮(※地図3)

元符万寧宮は、大茅山(※地図2)と中茅山(※地図2)との間に横たわる積金山(※地図2)の山中にある。我々一行は、崇禧万寿宮から十五分ほど山道を登ってここにたどり着いた。入口の前には景区バスの停留所もあり、その周囲には売店も多い。『茅山道教志』によると、現在の建物は一九八〇年以降に再建されたものだというのが、三天門など明代の遺構もわずかに残っている。また、ここには茅山道院の象徴とも言える高さ三十三メートルの巨大な太上老君像が建っている。これは一九九八年に完成したものだそうである。^{*26}

元符万寧宮の来歴については、『茅山志』巻一七「樓觀部篇」に記載がある。その書き出しには、まず「元符万寧宮は積金山に建っている。そこは陶弘景がかつて道を修める靖室を置いた場所だ」と見える。賈嵩の『華陽隱居内伝』には、陶弘景が積金山の西嶺に華陽館を立てたという記述があり、^{*27} また『真誥』の陶注からも、その住まいが積金山の西面にあったことが確かめられる。^{*28} したがって、もし崇禧万寿宮が華陽下館の跡地に当たるのであれば、元符万寧宮は華陽上館の跡地なのではないか、と想像したくなるかもしれない。しかし、『茅山志』によると、華陽上館の跡地に建っていたのは、どうやら崇禧万寿宮ではなく、華陽宮という道観だったようである。そして、そこには陶弘景の煉丹の井戸や樓閣の基礎なども残っていたという。^{*29} しかも、『茅山道教志』には、陶弘景の煉丹の跡は現在もまだ残っている、と書いてある。^{*30} 今回の調査では、筆者の下調べの甘さから、その場所を実見することはできなかったが、また別に機会を見つけて確認に行きたい。

さて、『茅山志』巻一七「樓觀部篇」には、続いて次のようにある。

〔後に〕北宋の劉混康(一〇三五～一一〇八)がそこ(陶弘景の故地)に庵を結んだ。劉先生は道の教えによって、哲宗の知遇を得た。哲宗は詔を

出して、先生の庵を元符観となした。崇寧五年（一一〇六）、観が落成すると、徽宗みずから扁額に題して「元符万寧宮」と呼んだ。……南宋の理宗朝が勅修し、「上清宗壇」と「聖德仁祐之殿」の二榜を御書した。^{*31}

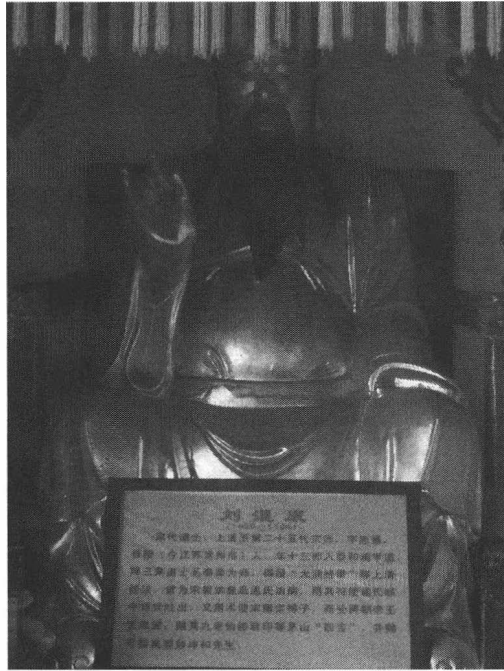


写真 11 劉混康像
(2012年8月末)

これによると、元符万寧宮は、実質的に劉混康の時代に創建されたようである。劉混康は、現在も元符万寧宮の宗師殿に祀られている。また、元符万寧宮には茅山の上清宗壇が設けられていたようであり、『茅山志』巻一の劉混康の伝記には、紹聖四年（一一〇九七）に、哲宗の勅命により、茅山が龍虎山と閻皂山と並ぶ經籙伝授の中心地になった、という記述が見える。^{*32}

3-3. 華陽洞、仙人洞（※地図3）

華陽洞と仙人洞は、ともに元符万寧宮から少し南に下った積金山の山中にある。華陽洞は現在、封鎖されているわけではないが、観光用に開放されているというわけでもないようである。茅山道院の潘副道長も、かつて一度入ったことがあるだけだ、とおっしゃっていた。洞窟内には、わずかばかりのライトが設置されているものの、おそらく懐中電灯などを持参していなければ、暗くて進むことができないだろう。また足場もよくない。通道には鉄格子のようなものが敷かれているが、その下には多量の水が流れている。鉄格子が腐食している可能性もあり、たいへん危険である。出口付近には比較的新しいレリーフが彫られていた。潘副道長の話によると、観光開発の計画もあったが、洞窟内にわき水が多いために頓挫したそうである。

注 31…元符萬寧宮、在積金山。陶隱居道靖故基。劉先生混康庵居其上。先生以道遇哲宗、詔以所居爲元符觀。崇寧五年落成、徽宗御題額曰元符萬寧宮。……理宗朝勅修、御書上清宗壇、聖德仁祐之殿二榜。（『茅山志』卷一七 1 a～b）

注 32…紹聖四年、勅江寧府、即所居潛神庵爲元符觀。別勅江寧府句容縣三茅山經籙宗壇、與信州龍虎山・臨江軍閻皂山、三山鼎峙、輔化皇圖。（『茅山志』卷一一 1 3 a）

仙人洞は、華陽洞からやや北に登った場所に位置している。ここは観光用に開放されており、洞窟内はカラフルにライトアップされている。華陽洞と同じく、細長い洞窟であり、林屋洞のような空間的広がりは見られない。狭い階段を登って洞窟を出ると、ちょうど元符万寧宮前の景区バス停留所付近の「仙人洞飯荘」という店の内側に着く。

『茅山道教志』によると、現在の華陽洞は、『茅山志』にいう華陽西洞に当たるという^{*33}。そこで『茅山志』を見てみると、「華陽西洞は、積金山の東嶺の下にある。陶隱居が積金山洞のひゅうひゅうと風が吹いている場所と言っているのはここである。代々の王朝が金籙斎を行なった際、ここに龍と簡を投じてきた。すなわち〔句曲の洞宮の〕西の通用門である」^{*34}と書いてある。ここでさらに『真誥』の記述を見てみよう。

注 33…楊世華／潘一徳
(二〇〇七) 二七一頁。

注 34…華陽西洞、在積金山東嶺下。隱居所謂積金山洞颼颼有風者是也。累朝金籙、投龍簡於此、即西便門也。(『茅山志』卷七「括神區篇」12a)

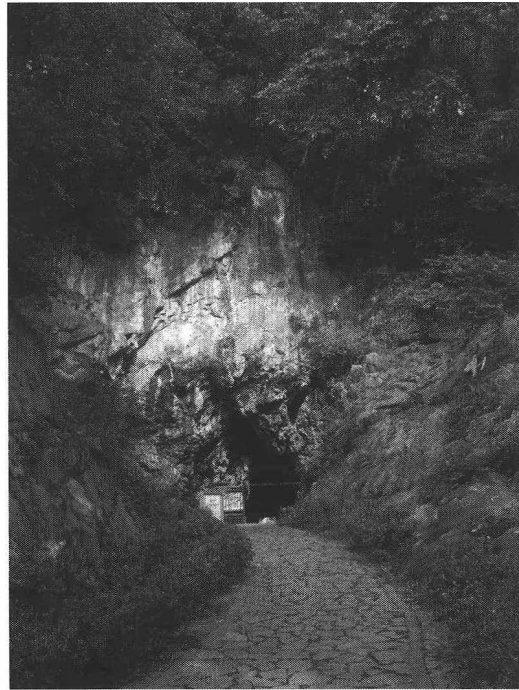


写真 12 華陽洞
(2012 年 8 月末)

大茅山と中茅山とを連ねる長い尾根の中ほどに連なった石があって、古くは積金山と呼ばれた。……〈これは、隱居が今住んでいるところの東面の横に連なる尾根のことである。この尾根はすべてきり立った石からなっており、その石の形はとても見事である。……西南に大きな石壁があり、聳え立って割れ目が入っている。その内部には洞穴があり、数丈も入ると、だんだん狭まって、もう人は入れなくなるが、ひゅうひゅうと風が吹いている。〉^{*35}

『茅山志』によれば、「華陽西洞」とは、陶弘景のいう「積金山洞」のことであり、

その「積金山洞」とは、『真誥』の陶弘景自身の記述によって言えば、積金山の西南の大きな石壁の割れ目にできた洞穴だ、ということがわかる。現在の華陽洞は、風も吹いていなければ、人が入れないということもないが、積金山の西南に位置し、しかも写真 12 に示したように、大きな石壁にできた洞穴だという点では、まさに陶弘景のいう洞穴に一致する。したがって、現在の華陽洞を『茅山志』のいう「華陽西洞」に同定する『茅山道教志』の記述は、かなりの的を射ているように思われる。ただ、『茅山志』は「華陽西洞」を積積山の「東嶺」に位置するとしているが、それはむしろ「西嶺」と言うべきではないだろうか。

また、もう一つ『茅山志』の記述に関して疑問に思うのは、華陽西洞を西通用門としていることである。西通用門とは、句曲の洞宮（華陽洞天）に通じる五つの門のうちの一つであり、『真誥』に次のように説明されている。

句曲の洞宮には五つの門がある。南の二つの通用門、東西に各一つの通用門、そして北に大きな通用門、全部で五つの通用門である。〈……東側と西側の通用門はともに所在がはっきりしない。中茅君のお告げに、「東通用門は中茅山の東、小茅山に続く丘のとつつきにあり、ここから入るのが洞天へ至る最短路であるが、外口はとても小さいうえに、石で塞いである」とある。この事は後に詳しく述べられており、西通用門もやはりこのような具合のはずで、今、石墳と呼びならわしているところにあるのに違いない。〉^{*36}

まず、もし華陽西洞（現在の華陽洞）が西通用門に当たるのであれば、ここで陶弘景が「西通用門の場所ははっきりしない」と言っていることと矛盾するのではないだろうか。なぜなら、さきほど見たように、陶弘景は『茅山志』の言う華陽西洞（「大きな石壁の割れ目にできた洞穴」）について、かなり具体的な記述を残しているからである。しかも、陶弘景はそこが西通用門に当たるとはまったく言っていない。また、ここでは「西通用門は、石で塞がれているらしい東通用門と同じような具合であり、石墳と呼ばれる場所にあるに違いない」と言われているが、華陽西洞は「大きな石壁の割れ目にできた洞穴」であり、石墳という言葉にはあまりそぐわないように思われる。したがって、華陽西洞（現在の華陽洞）を『真誥』のいう西通用門に同定するのは、やや早計ではないかと筆者は考える。^{*37}

3-4. 玉晨觀遺址（※地図4）

玉晨觀遺址は小茅山の北西の平地に位置している。今回は茅山道院の車で連れて行っていただいたのだが、もし公共の交通機関を利用して行く場合は、まず句容市の句容客運車站から茅山行きのバスに乗り、二茅路という停留所で降

注 35…大茅山中茅山相連。長阿中有連石。古時名爲積金山。……〈此即隱居今所住東面一橫壑也。此壑純絕石、石形甚瓌奇。……西南有大石（壁）〔壁〕、聳而坼開、內有洞。入數丈漸狹小、不復容人、乃緼緼有風〉（『真誥』卷一—10 a～b）※〈〉は陶弘景の注を表わす。また、『真誥』の訳文については、基本的に『真誥研究（訳注篇）』を参照したが、部分的に改めたところもある。以下、同じ。

注 36…句曲之洞宮有五門。南兩便門、東西便門、北大便門、凡合五便門也 〈……而東西竝不顯。中君告云、東便門在中茅東小茅阿口。從此入至洞天最近。而外口甚小、又以石塞之。事具在後。則西便門亦當如此。正應在今所呼作石墳處也。〉（『真誥』卷一—6 b）

注 37…土屋（二〇一二）一二～一四頁では、華陽洞と西通用門の問題についてさらに周到に考察している。



写真 13 玉晨村入口 (2012 年 8 月末)



写真 14 二茅路 (2012 年 8 月末)

りる。道路の東側に玉晨村と書いた表札（※写真 13）が見えるので、村のなかに入って道（＝二茅路※写真 14）をまっすぐ進む。二十分も歩けば、整備された道路（＝延茅路、212 県道）に突き当たるので、そこを南（右）に折れて少し進む。すると、道路の東側（右手）に北鎮街という集落が見えるので、入口から入って小さな道を道なりに進めば、ほどなくして玉晨観遺址にたどり着く。

個人的な話になるが、筆者は 2012 年 8 月末にも、酒井規史氏とともに玉晨観遺址を訪れた。その際は、玉晨村に行けばどうにかなるだろう、と思っていたのだが、玉晨観は茅山の他の道観と違って復興が進んでおらず、玉晨観に関する案内板のようなものはまったくなかった。最終的に、村人たちに尋ね回っ

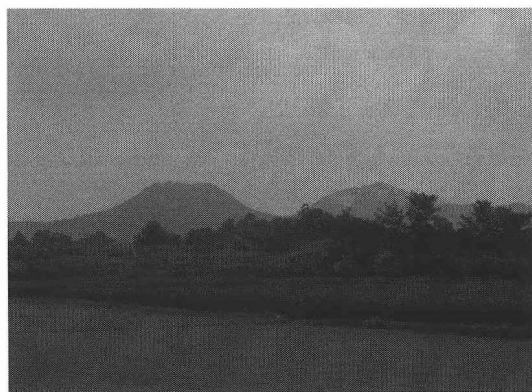


写真 15 玉晨村から見た小茅山（左）と中茅山（右）(2012 年 8 月末)



写真 16 玉晨村から見た雷平山（左）と小茅山（右）(2012 年 8 月末)

て、どうにか見つけ出すことができたのだが、玉晨観遺址と呼ばれる場所には、古いレンガ造りの民家（※写真 17）が建っているだけであり、文物局の立て札もなく、村人の口からそこが玉晨観遺址であることが確かめられただけだった。



写真17 玉晨観遺址（2012年8月末）



写真18 玉晨観遺址（2012年8月末）



写真19 玉晨観遺址



写真20 玉晨観遺址



写真21 玉晨観遺址のレンガ

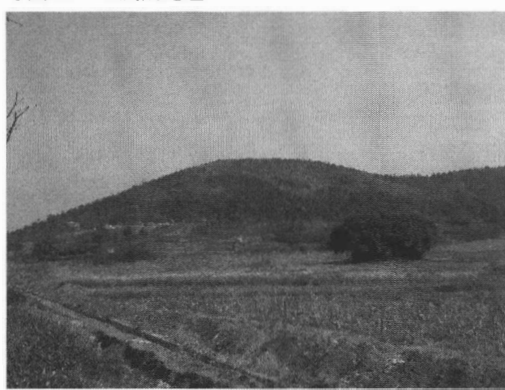


写真22 雷平山

ただ、そこには昔の道観の遺物らしきもの（※写真18）がわずかに転がっており、またその南東に雷平山らしき山が見えたことから、少なくともその辺りに玉晨観があったのだろう、と思うことはできた。

今回、茅山道院の方々とともに訪れたことで、その場所が玉晨観遺址であり、南東に見えた山が雷平山（雷公山）であることを改めて確認することができた。

ただ、筆者が8月末に見たレンガ造りの民家は、翌年3月末の調査の時点ではすでに取り壊され、辺りにレンガが積み上げられていた（※写真19）。茅山道院の方々の話によると、そのレンガはもともと玉晨観の建物に使われていたものだそうである。たしかに、よくよく見てみると、いくつかのレンガにはその産地を示すと思われる文字がうっすらと浮かび上がっていた（※写真21）。

ここで玉晨観の歴史をごく簡単に振り返ってみたい。現在の玉晨観遺址は、農村の民家に囲まれ、まるで何事もなかったかのようにひっそりとしているが、この場所が経てきた歴史は、茅山の他の道観のそれに比べても、ひときわ強い光彩を放っている。『茅山志』巻一七「樓観部篇」には次のようにある。

玉晨観は雷平山の北にある。高辛氏（帝嚳）の時代の展上公、周の郭四朝真人、秦の巴陵侯姜叔茂、漢の杜広平、東晋の楊真人（楊羲）、許長史父子（許謐と許翽）はいずれもここで得道した。南朝宋の太（泰）始年間（四六五～四七一）に、王という道士が推挙され、長沙景王（劉道憐）にたいへん重んじられるようになると、許長史の故宅の東に長沙館を建てた。^{*38} 天監十三年（五一四）には、梁の武帝がそこに改めて朱陽館を作り、陶真人（陶弘景）の住まいとするとともに、昭真台を建てて楊許三真人（楊羲、許謐、許翽）の真筆になる經典やお告げを供養した。その後、唐の太宗が桐柏先生（王軌）のために、そこに華陽観を建てた。また天宝七年（七四八）には、玄宗が玄静先生（李含光）のために、そこを紫陽観という名に改め、さらに付近の住民二百戸を召し上げ、租税と労役を免じて、長らく観の修復に当たらせた。ついで、南唐の王貞素がそこに住み、北宋の大中祥符元年（一〇〇八）には、勅命によって玉晨観という名に改められた。^{*39}

ここには、玉晨観という道観が、許長史宅（東晋）→長沙館（南朝宋）→朱陽館（梁）→華陽観（唐）→紫陽観（唐）→玉晨観（北宋）というように変遷してきたことが示されている。^{*40} 筆者がとくに興味深く思うのは、玉晨観が陶弘景の朱陽館さらには許長史宅の跡地だとされていることである。そこで以下に、玉晨観遺址と朱陽館、許長史宅とのつながりを他の資料によって確かめてみることにしたい。『真誥』には、許長史宅について次のように記されている。

許長史が今営んでいる家は、東面に対して小さな山があつて、雷平山という。……く雷平山は小茅山の北にあつて、裾野が連なっている。……許長史の家は壊れてしまった後、はっきりとその場所を知る者がいなくなった。宋の初めになって、長沙景王と檀太妃が陳という姓の道士を供養し、彼のために道士の庵を雷平山の西北に建てたが、それが現今の北廨である。そ

注 38…長沙館の年代は、ここには宋の太始中とあるが、これは『茅山志』の誤りだろう。なぜなら、以下に見るように、『真誥』の陶注と陶弘景の「許長史旧館壇碑」では、その年代を宋初としているからである。また、そもそも長沙景王は南朝宋初に没している。

注 39…玉晨観、在雷平山北。高辛時展上公、周有郭四朝真人、秦巴陵侯姜叔茂、漢杜広平、東晋楊真人・許長史父子、竝此得道。宋太始中、道士王舉爲長沙景王雅所推重、就長史宅東起長沙館。梁天監十三年、勅買爲朱陽館、爲陶真人住止、立昭真臺、供養楊許三真人眞蹟經誥。唐太宗爲桐柏先生、勅建華陽観。天寶七年、玄宗爲玄静先生、勅改紫陽観。仍勅取側近百姓二百戸、竝免租徭、永充修葺。南唐王貞素繼居之。宋大中祥符元年、勅改玉晨観。（『茅山志』巻一七「樓観部篇」2 a～b）

注 40…なお、東晋の楊真人と許長史父子の前には、高辛氏の時代から漢代に至るまでの得道者の名も挙げられており、これらはいずれも『真誥』『稽神枢』の中茅君のお告げに由来する記述であるが、いまは史実であるかどうかは問わないことにしたい。

の後また句容山其の王文清なる者があり、後にこの庵の主となり、伝記を見て、許氏がその昔ここに家を建てたことを知り、土地の古老に広く聞いた。大明七年（四六三）になって、述墟の老人の徐偶という者がおり、彼の先祖は許長史に仕えていたので、許長史の家の場所が現在の庵の前の烏柏の木のところであったことを代々伝え知っている。きっとまだ齋堂の前の井戸も残っているだろうとのことであった。当時、そのあたりは草ぼうぼうで何もかも埋もれており、王文清がすぐに草を刈って探してみると、果たして煉瓦積みの井戸が見つかった。……かくて、ここが許長史の故居であることがはっきりと分かった。それまでずっと廃墟となっていてあえて住もうとする者はなかったのである。〉^{*41}

この『真誥』の記述を地図4に照らし合わせてみると、玉晨観遺址の場所と許長史の家の場所とが、ほぼ重なり合うことがわかる。すなわち、両者はともに雷平山の西北に位置しているのである。また、王文清が見つけたという井戸は、陶弘景の「許長史旧館壇碑」によると、許長史が掘った井戸に当たるとあるが^{*42}、陳世華『『瘞鶴銘』・天監井欄與陶弘景書法』によると、一九八一年に玉晨観遺址で発掘された井戸の欄干に「此是晋世真人許長史舊井。天監十四年更開治、十六年安闌」という銘文が彫られていたという^{*43}。この銘文は、ここに許長史の家があったことの有力な物的証拠となるだろう。

続いて、さらに陶弘景の「許長史旧館壇碑」を見てみると、「晋の太和元年（三六六）になって、句容の許長史がここに暮らすようになった。その跡はまだ残っている。宋の初めには、長沙景王がその地の東に道士の精舎を建てた。〔また、〕梁の天監十三年（五一四）には、勅命によってこの精舎が改築され、朱陽館が建てられた」^{*44}とある。以上に述べたことから、やや雑ではあるが、ひとまず「許長史宅→長沙館→朱陽館……→玉晨観遺址」というつながりを裏付けることができたと言えるだろう。

さて、「玉晨観遺址→……朱陽館→長沙館→許長史宅」という過去に思いを馳せながら、玉晨観遺址という場所に立つとき、筆者のみならず、道教に興味を持つ人の多くは、おそらく大きな感慨を覚えるのではないだろうか。なぜなら、ここは楊羲と二許がかつて神降ろしを行なった場所であり、楊羲に真人たちが舞い降りた場所の一つだからである。陶弘景は『真誥』のなかで、楊羲について次のように述べている。

興寧三年（三六五）乙丑の年、多くの真人たちが降臨して誥授した。三十六歳の時のことである。真人たちが降臨した場所は一定しておらず、あるいは都であったり、あるいは自分の家であったり、あるいは山館であったりした。山館とはやはり雷平山の許長史の庵のことである。楊君は、日

注 41…許長史今所營屋宅、對東面有小山、名雷平山。……〈雷平山在小茅北、基址相連。……長史宅自溼穀之後、無人的知處。至宋初、長沙景王檀太妃、供養道士姓陳、爲立道士廡於雷平西北、即是今北廡也。後又有句容山其王文清、後爲此廡主、見傳記、知許昔於此立宅、因博訪耆宿。至大明七年、有術虛老公徐偶、云其先祖伏事許長史、相傳識此宅只在今廡前烏柏樹處、應是似猶有齋堂前井存。于時草萊蕪沒、王即爰除尋覓、果得磚井。……於是審知是故宅。從來空廢、無敢居者。〉（『真誥』卷一三 16b～17a）

注 42…宅南一井、即長史所穿。（『華陽陶隱居集』卷下「許長史旧館壇碑」4a）

注 43…『茅山道教志』（二三三～二三四頁）によると、この井戸の欄干は現在、茅山の九霄万福宮に保管されているそうである。

注 44…至晋太和元年、句容許長史在斯營宅、厥迹猶存。宋初、長沙景王、就其地之東、起道士精舍。梁天監十三年、勅置此精舍立爲朱陽館。（『華陽陶隱居集』卷下「許長史旧館壇碑」1b）ただ、許長史は三六五年の八月以前にすでにここに舎屋を建てはじめていたようである。張超然（二〇〇七）一〇四～一〇五頁。

注 45…興寧三年乙丑歲、衆真降授、年三十六。眞降之所、無正定處、或在京都、或在家舍、或在山館。山館猶是雷平山許長史廡。楊恆數來就掾、非自山居也。（『真誥』卷二〇 12a）

頃いつも足しげく許掾のところへやって来ていたのであり、自ら山中で暮らしていたのではない^{*45}。

これによると、真人たちが降臨した場所は一定しなかったようであるが、許長史宅がその一つだったことは間違いない。また、楊羲がやって来て、許長史たちに真人たちの言葉を書き取らせていたのも、この場所だったと考えることができる^{*46}。つまり、ここ玉晨観遺址は、後世に多大な影響を及ぼした『真誥』および上清経のゼロ地点とも呼べる場所なのである。

さらにその後、天監十三年（五一四）に梁の武帝によって朱陽館が建てられると、翌年十月、陶弘景とともにその弟子の一人周子良がここに移ってきた^{*47}。周知のように、周子良も楊羲と同じように真人たちと接することのできた人物であり、彼の残した接真の記録は、陶弘景によって『周氏冥通記』としてまとめられた。周子良の記録の大部分は、天監十四年（五一五）の五月から七月にかけてのものであるが、彼が朱陽館に移ってきた十月以降にも、やはり真人たちとのやり取りは続いていたようである。『周氏冥通記』巻四には、その際のメモ書きが残されており、朱陽館における真人たちとの交流のようすを垣間見ることができる。

以上、現在、玉晨観遺址と呼ばれる場所で起こった真人たちの降臨とその記録について取り上げてみたのであるが、わずかにこの二つの事件だけをもってしても、玉晨観遺址は茅山という聖地のなかの聖地とも呼べるほどの神秘性に満ちた場所だと言えることができるのではないだろうか。「く金陵の地は広いが、ここが最もすぐれた土地であり、真仙でなければ住めない」^{*48}と陶弘景が述べているように。

なお、『茅山志』巻一七「楼観部篇」の記述において見た通り、この場所の歴史はその後脈々と続いてゆく。元代の『茅山志』や清の笪重光が重修した『茅山志』には、玉晨観を含め、この場所に代々建てられてきた道観に関する資料が少なからず収められている。これらの資料については機会を改めて整理してみたい。

注 46…『真誥』巻一九に「長史掾立宅在小茅後雷平山西北。掾於宅治寫修用」(10a)とある。

注 47…『周氏冥通記』巻一(2a～b)。

注 48…「金陵之地乃廣、則此爲最勝之地、非真仙不得居。」(『真誥』巻一三16b)

4. 3/22（金）の調査

08:45	晴れ。タクシーに乗って句容市街から茅山景区へ向かう。
09:45	やや道に迷いながらも乾元観（※4-1）に到着。女道士に観内を案内していただく。
10:30	客堂にて乾元観の尹信慧住持のお話を伺う。
11:30	茅山の素食をごちそうになる。
12:30	尹住持の厚意により、調査用の車を手配していただく。運転手の到着を待つ。
13:15	車に乗って乾元観の裏手に回る。車を降りた後、運転手の案内に従って、老君洞、三官洞、柏子洞を目指し、山道を進む。
13:30	老君洞（※4-2）に到着。
13:45	三官洞（※4-2）に到着。
14:00	柏子洞（※4-2）に到着。
14:30	車に戻る。陶金氏の地図を頼りに良常山を探す。
15:00	良常山（※4-3）に到着。
16:30	老虎洞（古良常洞）の調査を終え、句容市街に戻る。

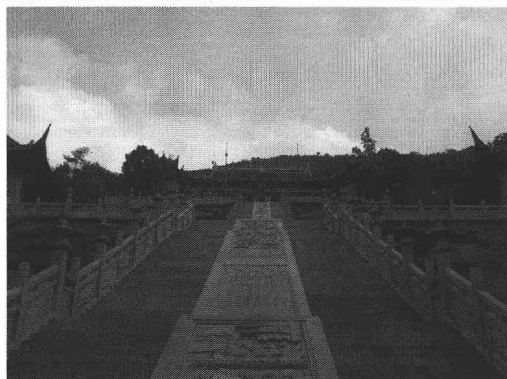


写真 23 乾元観（2012 年 8 月末）

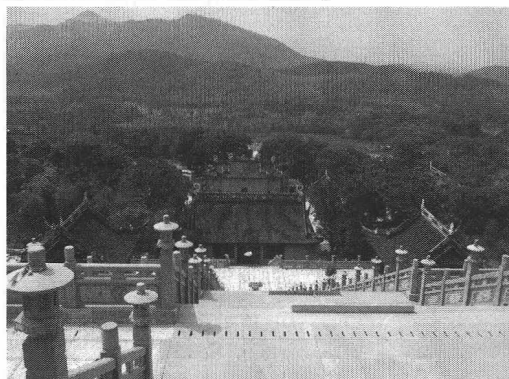


写真 24 乾元観（2012 年 8 月末）

4-1. 乾元観（※地図4）

乾元観は全真教龍門派の坤道観（女性道士の道観）である。玉晨観遺址のほぼ真東に当たり、茅山（句曲山）全体で見れば、だいたい北のほうに位置している（※地図2）。鬱岡山（大青龍山）という山の南側の斜面に沿って、真新しい

建物が階段状に建っている（※写真23、24）。『茅山道教志』によると、現在の建物は一九九四年以降に再建されたものだそうである。大きな道観であるが、交通の便がそれほどよくないためか、観光客はほとんどおらず、かつ緑に囲まれており、たいへん静かだった。山門から続く階段を登り切った最上部には大羅宝殿が建っているのであるが、その前からは小茅山と中茅山がきれいに見渡せる。また、すぐ手前には白虎山という小さな岩山があり、女道士の話によると、そこには昔の道士の遺物がたくさん埋まっていたとのことである。なお、現在の行政区画で言えば、崇禧万寿宮や元符万寧宮が句容市（鎮江市）にあるのに対し、乾元観は金壇市（常州市）の側にある。

この道観も古い歴史を持つようであり、『茅山志』巻一七「棲観部篇」には、



写真 25 山中宰相煉丹採藥図



写真 26 松風閣跡地

注 49…乾元観、定録君謫言、大横山下有泉水、昔李明於此合神丹而昇玄洲。天監十四年、隱居荆鬱岡齋室、以追玄洲之蹤。天寶中、玄靜先生居之、勅建棲真堂、會真・候仙・道德・迎恩・拜表五亭。大中祥符二年、觀妙先生築九層壇行道。天聖三年、賜名集虛庵、續勅改今額。（『茅山志』巻一七「棲観部篇」4a～b）

乾元観。定録君は、「大横山の麓に泉があり、昔、李明がそこで神丹を作って玄洲に昇った」というお言葉を告げられた。天監十四年（五一五）には、陶隱居が鬱岡の齋室を作り、玄洲の跡を慕った。唐の天寶年間（七四二～七五六）には、玄靜先生（李含光）がここに住み、勅命を受けて、棲真堂と会真・候仙・道德・迎恩・拜表の五つの亭を建てた。北宋の大中祥符二年（一〇〇九）には、観妙先生（朱自英）が九層の壇を築いて行道をした。また、天聖三年（一〇二五）には、集虚庵という名を賜わり、続いて勅命によって今の扁額（乾元観）に改められた。^{*49}

と述べられている。李明真人の話は『真誥』「稽神枢」に、陶弘景の話は「許



写真 27 老君洞

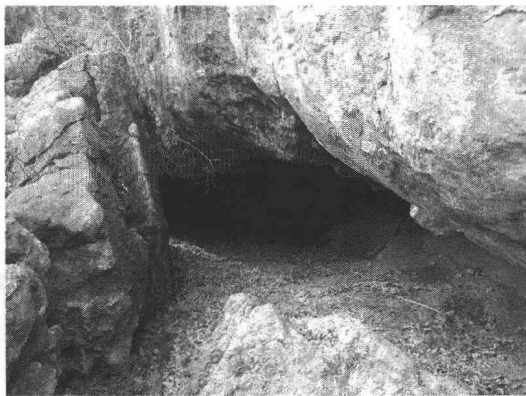


写真 28 老君洞洞口

長史旧館壇碑」に由来するものと思われる。陶弘景が鬱岡の斎室を作ったのは天監十四年であり、ちょうど朱陽館に移った年と同じである。『周氏冥通記』によると、周子良が天監十五年（五一六）の十月に亡くなったとき、陶弘景は鬱岡にて隠斎中だったとあるから、朱陽館に移ると同時に鬱岡へもしばしば出かけるようになったのだろう⁵⁰。

今回、乾元観に行った際、客堂のなかに「山中宰相煉丹採藥図」（※写真 25）

注 50…『茅山志』卷二〇「録金石篇」「梁碑」に収める「〔許長史旧館壇碑〕碑陰記」には、「十五年、移鬱岡齋室靜齋」（12a）とある。〔 〕内は『陶弘景集校注』による。



写真 29 三官洞洞口

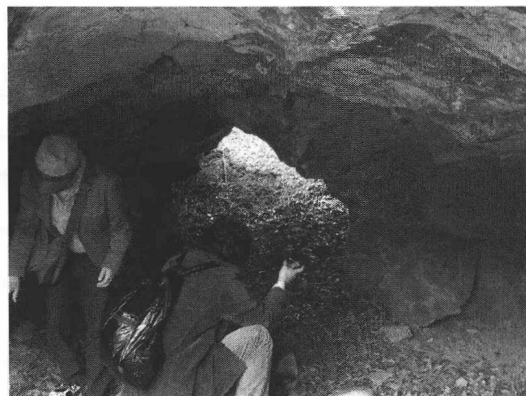


写真 30 三官洞

が飾られているのを見つけることができた。『茅山乾元観』によると、日中戦争以前の乾元観には、宰相堂や松風閣（※写真 26）など陶弘景に縁のある建物があり、松風閣には陶弘景像も祀られていたという。しかし、それらは戦火に遭って燃えてしまったそうである⁵¹。

注 51…『茅山乾元観』編委会（二〇一〇）九頁、三〇～三一頁。

4-2. 老君洞、三官洞、柏子洞（※地図 4）

我々一行は、乾元観から車に乗り、その少し北西を走る茅墓路（404 郷路）に出て、そこで車を降り、山道に入ってしまった。乾元観の運転手の案内に従って、緑に覆われたなだらかな道をしばらく進むと、左手側に大きな岩が隆起した部分



写真 31 柏子洞洞口

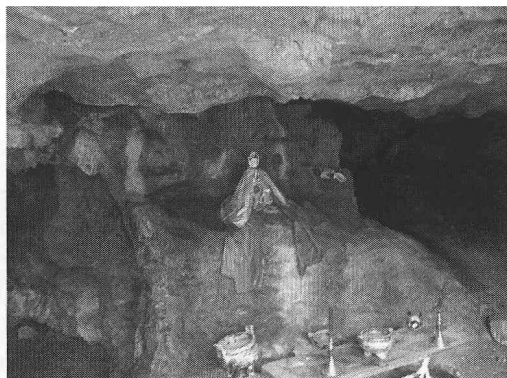


写真 32 柏子洞の観音像

が現われた（※写真 27）。ここが老君洞である。この洞窟は、隆起した岩と地面とのすき間に生じた空間のようである。洞口は大きく開けており（※写真 28）、その上には「老君洞」という文字が彫られていた。奥行きは浅く、ちょうど車二台分の車庫くらいの広さである。

再び山道を歩いてゆくと、左手側にすぐにまた巨大な岩があり、大きな洞口が見える（※写真 29）。ここが三官洞である。老君洞と同じく、隆起した岩と地面とのすき間に生じた空間のようである。洞口はアーチ状に大きく開けており、その上には「三官洞」という文字が彫られている。奥行きはたいへん浅く、しかもトンネルのように抜けられるようになっている（※写真 30）。

三官洞を後にして、しばらく行くと、やはり左手側に見えてくるのが柏子洞である（※写真 31）。三つの洞窟のなかでは最も大きい。洞口は左右に大きく開けており、その脇には「柏子洞」という文字が彫られている。そして、その下にはさらに「常寶子」という文字が見える。「柏子洞」の文字を彫った人物だろうか。誰であるのかはよくわからない。洞窟内は二つの部屋に分れており、一つには比較的新しい観音像が祀られている（※写真 32）。もう一つの部屋には、おおよそ車庫二つ分の奥行きがあり、その奥にはさらに小さな穴が続いているが、人が通れるほどのすき間はなく、どれくらいの深さなのかはわからない。他の二つの洞窟と違って、柏子洞のなかは湿気が多く、地面も粘土質になっていた。

これら三つの洞窟については、残念ながら、文献資料とのすり合わせができなかった。『茅山志』巻六「括神区篇」には、茅山の洞窟がいくつも挙げられているが、同名または近い名の洞窟はない。また、地理的に見れば、「雷平山の東北、良常山の東南にある」とされる方隅山の方隅洞と燕口洞^{*52}が近いようにも思われたが、『真誥』の陶注によると、方隅山（燕口山）は大横山の西南に位置しているという。^{*53}したがって、大横山（鬱岡山）の乾元観よりも北にあるこれら三洞窟が、方隅洞、燕口洞のいずれかに当たることはなさそうである。

注 52…方隅山。真誥云、雷平山之東北、良常山之東南、其間燕口山三小山相隅、名曰方隅山。（『茅山志』巻六「括神区篇」7 a）方隅洞、在方隅山上。（『茅山志』巻六「括神区篇」14 a）燕口洞、在方隅山南。（『茅山志』巻六「括神区篇」13 b）

注 53…雷平山之東北、良常山之東南、其間燕口山。三小山相隅故也。一名曰方隅山。……〈其山即是大横西南……〉（『真誥』巻一四2 b～3 a）

4-3. 良常山、老虎洞（※地図4）

我々一行は、柏子洞から車を降りた場所に引き返し、そこから再び茅墓路（404 郷路）に沿って老虎洞水庫へ向かった。陶金氏の地図によると、良常山は老虎洞水庫の西南に位置する。茅墓路を南から北へ走ってゆくと、老虎洞水庫のダムよりもやや手前の道路右側（東側）に小さな登山口（※写真 33）が見えるのであるが、そこから良常山に入ることができる。

老君洞、三官洞、柏子洞を案内してくれた乾元観の運転手も、良常山には来たことがないということだったので、我々は地図を頼りに老虎洞（古良常洞）を探してみるべく、山道を分け入ってゆくことにした。さきほどの三洞窟と同じように、大きな岩場を見つけさえすれば、そこに洞口があるはずだ、と我々は期待していたのだが、辺りには藪が多く、たいへん見通しが悪い。幸い途中で、ダム湖に釣りに来た地元民とすれ違ったので、彼らに尋ねてみると、老虎洞はその辺りにあるよ、と指で差してくれた。どうやら、地元民にはわりとよく知られた洞窟のようである。しかし、その助言は、藪の陰が岩場に見えてしまう、という錯覚を我々にもたらしただけだった。

我々は、老虎洞（古良常洞）の近くまで来たはずだ、ということをひとまずの成果として、車に引き返すことにした。車に乗って茅墓路を行くと、たまたま複数の地元民とすれ違った。運転手が彼らに尋ねてみると、やはり老虎洞の場所を知っていると言う。運転手がうち一人と交渉してくれ、幸い、老虎洞に案内してもらえることになった。地元民と運転手を先頭に、再びさきほどの登

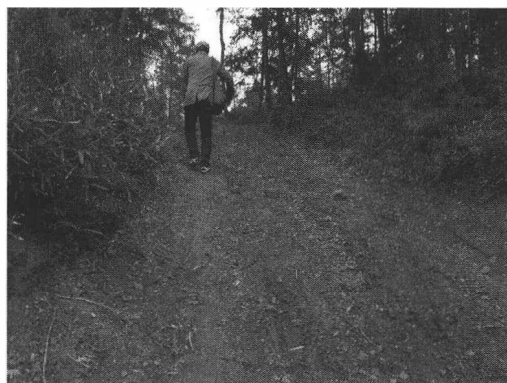


写真 33 良常山登山口



写真 34 老虎洞（古良常洞）



写真 35 老虎洞（古良常洞）

山口から山道に入る。登山口から数百メートルほど進んだところで山道を外れ、ダム湖の側に向かって深い藪のなかに分け入ってゆく。藪だらけの山の斜面である。何も見えない。棘のある植物が繁殖しており、服を通して体中に突き刺さる。地元民もはっきりと場所を記憶しているわけではないようである。藪のなかをしばらく迂回しながら進むと、地元民について先に進んでいた運転手が大声を上げる。洞窟が見つかったようである。我々も一歩遅れて、どうにか洞窟にたどり着いた。

洞窟はたしかに岩場にあったのだが、岩が隆起しているわけではないので、藪に覆われていると、まったくわからない。洞口は山の斜面に対して、垂直に落ち込むようなかたちで大きく開いている。さすがに、なかに入って調査することはできなかったが、どうやら内部には二つの穴があるようで、一つには石を投げ入れると、ドボンという音がしたので、水が溜まっているのだろう（※写真 35）。もう一つの穴は、深さ五メートルくらいだろうか、底は普通の地面のようになっていた（※写真 34）。あたかも山の斜面がぱっくりと縦に割れ、別世界への扉を開いているかのようである。

唐の司馬承禎『天地宮府図』（『雲笈七籤』巻二七所収）を見ると、良常山は三十六洞天之第三十二洞天に挙げられている。また、陶弘景によると、良常洞は句曲の洞宮（華陽洞天）の北側の大きな通用門に当たり、^{*54}そこには鬼神が往来している^{*55}という。『真誥』には、良常山に関するエピソードがいくつか載っているが、そのうち筆者が最も興味深く思うのは、許長史の息子の許掾（許翹）がここで仙化した、とされていることである。陶弘景は次のように言う。

〔許掾〕は清純で高潔、世俗の仕事をくらだぬものとみなし、雷平山の麓

注 54…句曲之洞宮有五門。南兩便門、東西便門、北大便門、凡合五便門也。〈今山南大洞即是南面之西便門。東門似在柏枝隴中、北良常洞即是北大便門。〉（『真誥』巻一一 6 b）

注 55…〈北大洞猶有鬼神去來。〉（『真誥』巻一一 6 b）

に住まって修行一途に励み、早く洞室に遊びたいといつも心に願い、人の世には長く留まっていたくないと思った。かくて北洞に出かけてこの世に別れを告げた。……く故老たちの言い伝えに、「許掾はそこで北洞の北にある石壇の上で焼香礼拝し、突っ伏したまま起き上がらず、翌朝確かめてみると、その肉体はあたかも生きているかのようであった」とある。この石壇は今もお歴然と残っている。つまり、(許掾は)仙化して俗世の穢れを早く断ちたいとことさらに求めていたのである。>^{*56}

ここには、「北洞」に出かけてこの世に別れを告げたとあるだけで、「良常洞」と言われているわけではないが、『茅山志』巻六「括神区篇」では、良常洞について「洞窟の北にある石壇は、許真人が焼香と礼拝によって解化した場所である。『真誥』の言う「北洞でこの世に別れを告げた」というのは、ここでのことなのだ」^{*57}と述べられている。また、『真誥』の陶注においては、「く此云如華陽三便門、則南洞北洞本大開、餘東西及東南皆是塞矣」(巻一四3b)という例のように、「北洞」という語が北側の大きな通用門すなわち良常洞を指す場合があり、さらに「く北良常洞即是北大便門」(巻一一6b)や「く良常北洞」(巻一一9a)という用例も見えるので、『茅山志』の説をとくに疑う必要はないだろう。さらに、『真誥』巻一一には次のようにある。

お告げに、「洞口の西北に一地があり、その地はいささか高く不安定だが、外静舎を建てることができる」とあります。私はもともと内静舎と外静舎を建てようと思っていましたので、どう建てたらよいかを考えてみます。くこの外静舎を建てたということは聞いていないが、今は石を積み重ねた一つの祭壇がはっきりと残っていて、言い伝えでは許掾がこの祭壇のところで仙化して身を隠したという。そこへ出かけて拝見するたびに、感嘆の念が心から離れない。>^{*58}

この本文の部分は、中茅君のお告げに対する許長史の答書であるが、その少し前に載せられている中茅君のお告げ(巻一一14a)を見れば、これが良常山に関する話だということが明らかにわかる。また、陶注の部分(く)内)によると、陶弘景は許掾が仙化したという石壇を幾度か見に来ていたようである。今回の調査では、石壇の有無を確認する余裕はなかったが、現在、良常山の東から北にかけては、老虎洞水庫が広がっているため、いずれにせよその跡を探し出すのは難しかったのではないかと思う。

ところで、最後に一つ検証しておきたいことがある。我々は、陶金氏が独自の調査にもとづいて作成したという地図を頼りに、良常山にたどり着いたのだが、良常山の位置は一般の地図には記されておらず、茅山道院や乾元観の道士

注56…清秀瑩潔、糠粃塵務、居雷平山下、修業勤精、恆願早遊洞室、不欲久停人世。遂詣北洞告終。……く耆老傳云、掾乃在北洞北石壇上、焼香禮拜、因伏而不起、明旦視形如生。此壇今猶存歷然。則是故求隱化、早絕世塵也。>(『真誥』巻二〇9b～10b)

注57…洞北石壇、即許真人據焼香禮拜解化之處。真誥所謂北洞告終以此。(『茅山志』巻六「括神区篇」12b)

注58…告洞口西北有一地、地小危不安、可立外静舎。愚意本自欲立内外静舎、輒當疇量在宜。く亦不聞立此外静事、而今有一累石壇歷然。相傳乃言、掾於此壇化遯也。每往拜視、輒感嘆纏心。>(『真誥』巻一一19a)

たち、さらには道を尋ねた数人の地元民も、良常山には行ったことがなく、その具体的な場所はよくわからない、という反応が多かった。つまり、良常山の位置は、自明のものとは言えないのである。筆者はここまで、「老虎洞＝良常洞」という前提のもとに話を進めてきたが、果たして我々が調査したあの山は、本当に良常山だったのだろうか。そこで以下に、良常山および良常洞の位置について検証してみることにしたい。

筆者は、陶金氏がどのようにして良常山の位置を特定したのか詳しく知らないが、『真誥』と『周氏冥通記』の記述から見れば、やはりあの山が良常山であってよいように思われる。第一に、『真誥』の陶注には「く小茅山より後方へ行くと、雷平、燕口、方嶠、大横、良常の諸山があつて延々と連なり、……」^{*59}とあり、ここから少なくとも、良常山は乾元観のある大横山（鬱岡山）よりも北にある山のどれかだ、ということがわかる。第二に、『真誥』の中茅君のお告げに、「良常山の北側の洞宮の入口は山嶺のところに当たっている」^{*60}という言葉があるのだが、これも老虎洞が山の北面に位置し、かつ麓ではなく山の尾根に近い斜面に洞口があったことと一致する。第三に、同じく中茅君のお告げに、「良常山の穴口から東の方に小山の嶺が見える」^{*61}とあるが、老虎洞は山の北面の東向き（ダム湖側）の斜面にあるので、洞口も東向きに開けていると言える。また、グーグルの衛星地図（※地図4）で見る限り、もし藪がなければ、洞口からはダム湖を挟んで東側に小さな山々が見えるはずである。第四に、『周氏冥通記』の陶注には、「く良常山は朱陽館の東北十里ばかりにあり、その山はだらだら連なつた丘陵がここまで達している」^{*62}とあるが、衛星地図（※地図4）で見ると、老虎洞水庫は玉晨観遺址（もと朱陽館）の北北東に位置しており、百度の地図で距離を測定してみると、直線距離で約4kmである。したがって、陶弘景が歩いて測った「東北十里ばかり」という方角と距離からも、老虎洞水庫の西にある山が良常山である可能性は高いと言えるのではないだろうか。

以上、四つの観点から良常山の位置について検証してみた。にわか仕立ての検証でいささか雑な部分もあるかもしれないが、筆者としては、良常山の位置については、ひとまず陶金氏の地図の示す通りで間違いないと考えておくことにしたい。

注 59…く自小茅山後去、便有雷平・燕口・方嶠・大横・良常諸山、靡迤相屬、……。>（『真誥』巻一一 3 b）

注 60…良常北垂洞宮口直山嶺。（『真誥』巻一一 7 b）

注 61…良常山對穴口東視小山之嶺。（『真誥』巻一一 15 b）

注 62…く良常在朱陽東北十里許、山連岡亦至此間。>（『周氏冥通記』巻一 14 b）
※『周氏冥通記』の訳文については、『周氏冥通記研究（訳注篇）』を参照した。

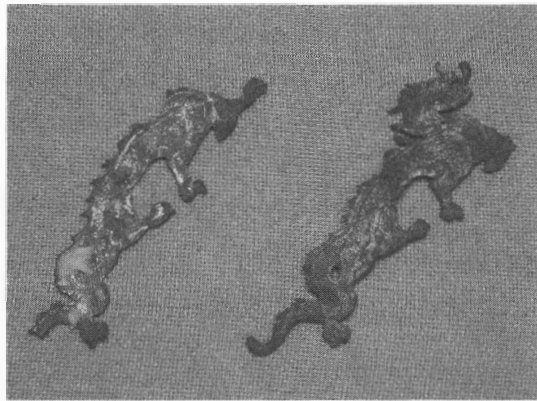
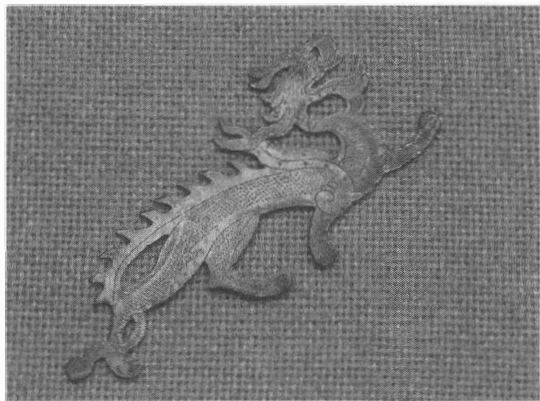
5. 3/23（土）の調査

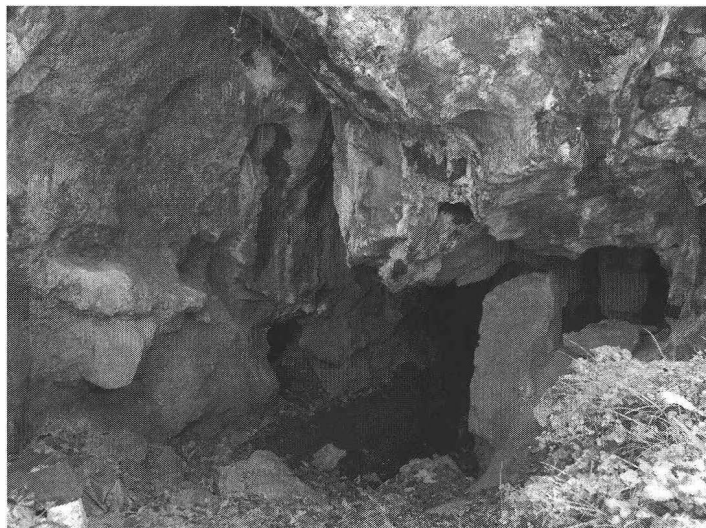
09:15	薄曇り。タクシーに乗って出発。
09:30	句容市街の葛仙湖公園に到着。葛仙観を簡単に見学し、『茅山道院歴代碑銘録』などの本を購入。
09:45	公園内の華陽書院（句容市博物館）を見学。投龍簡の鎏金龍（※5-1、写真 36）などを見る。ここには碑林もあり、清代の「葛玄墓碑」や南朝の「梁解中散大夫貞白先生陶隱居碑」、唐代の「景昭大師碑」、明代の「許蓋斎墓志銘」「許蓋斎墓碑」など数点が陳列されている。
10:15	再びタクシーに乗り、茅山景区へ向かう。
11:00	崇寿観（※地図 3）の前でタクシーを降りる。ここは大茅山の東側の麓であり、金壇市側における茅山景区への入口になっている。チケットを買い、金牛洞（※5-2）へ向かう。数分後到着。見学後、大茅山をさらに登って茅洞へ向かう。
11:45	茅洞（※5-3）に到着。見学後、大茅山をさらに登って元陽観へ向かう。元陽観（※5-4）に到着。
12:00	タクシーに乗って句容市街のホテルに戻る。
12:30	昼食後、タクシーに乗って南京に向かう。
14:00	南京市街のホテルに到着。
15:30	

5-1. 句容市博物館蔵投龍簡遺物

『茅山道教志』を見ると、一九八五年に茅山の玉柱洞（※写真 37）から出土した晩唐時期の三体の鎏金龍が句容市博物館に所蔵されている、と書いてあ

写真 36 句容市博物館に展示されていた投龍簡の鎏金龍





注 63… 楊世華／潘一徳
(二〇〇七) 二三三頁。

る。^{*63} この三体の鑲金龍がそれに当たると見て間違いないだろう。玉注洞は、仙人洞と華陽洞の間に位置する。なお、博物館の展示パネルには「鑲金龍／北宋／銀器」と表示されていた。

5-2. 金牛洞（※地図3）

金牛洞は大茅山の南東の麓に位置する。風景区の門をくぐり、左側（南西）に折れて下ってゆくこと数分、茶色いごつごつとした岩場が見えてくる。その辺りは、かなり広い範囲にわたって地面が陥没している（※写真 38）。急な階段を下って行くと、まず左手側の壁に「金牛洞奇伝」という石刻があり、続いて財神が祀られている場所に着く。さらに下って行くと、洞口の前に雄々しい牛の像が安置され（※写真 40）、洞口の上に「金牛洞」という文字が彫られているのが見える。洞窟内は封鎖されていないが、ライトアップもされておらず、懐中電灯などがなければ、暗くて奥まで入ることはできない。高さは 3m、奥行きは 30m くらいだろうか。人が通れないほどの小さな穴がさらに奥に続いているようだった。

注 64… 金牛穴、在栢枝洞東、秦時採金、獲金牛、爲女子所觸、遂擲而出。（『茅山志』卷六「括神区篇」15a）

注 65… 〈今大茅山南猶有數深坑大坎、相傳呼之爲金井。當是孫權時所鑿掘也。〉（『真誥』卷一一3b）

注 66… 土屋（二〇一二）八～一一頁に依拠した。

金牛洞については、『茅山志』卷六「括神区篇」に「金牛穴は栢枝洞の東にある。秦の時代、金を採掘していると、金牛が出てきたが、女性に触れられると、躍り上がって飛び出して行った」^{*64} とある。これによると、ここでは金が採掘されていたようである。『真誥』には、金牛穴という名は見えないが、「く今、大茅山の南にはまだなお深く大きな穴がいくつかあり、あい伝えて金井と呼んでいる。きっと孫権の時に掘鑿したものであろう」^{*65} とあり、陶弘景が大茅山の南に巨大な金の採掘跡があったことを伝えている。『茅山志』は秦の時代と言い、陶弘景は孫権の時と言い、両者に相違が見られるが、いずれにせよ、金牛洞は古い金の採掘跡に当たるものと見てよいだろう。^{*66}

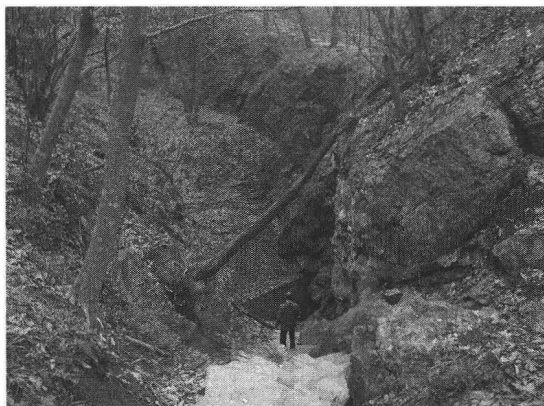


写真 38 金牛洞



写真 39 金牛洞洞内

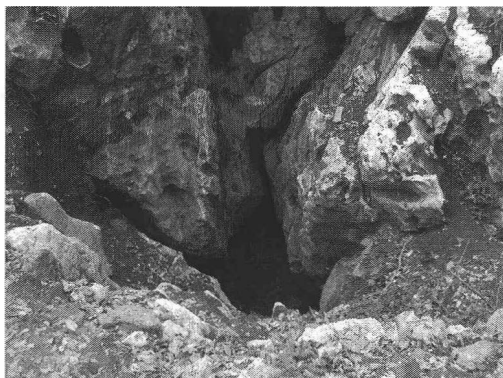


写真 40 金牛洞洞口と躍り上がる金牛

5-3. 茅洞（※地図 3）

金牛洞から山道を登ってゆくと、元陽観に通じる車道に出る。その車道をしばらく行くと、財神殿が見えてくるのであるが、そこを通り過ぎてもう少し行くと、左手側（西側）に小道が延びているのが見える。その道をまっすぐに進んでゆくと、右手側に少し開けた場所があって、その奥に洞窟がある（※写真

写真 41.42 茅洞



41)。岩と岩とのすき間にできた空間が、垂直に深く落込んでいる（※写真 42）。垂直型という点では、老虎洞（古良常洞）によく似ている。ただ、どれほどの奥行きがあるのかはわからなかった。洞窟および周辺には、土を掘り返したような跡もあった。現在、観光開発中なのだろうか。

『茅山志』巻六「括神区篇」には、「茅洞は元陽観の石壇の下にある。すなわち南面の西通用門である。定録君のお告げに「大茅山に小穴が南面にあって南の通用門という。ただ精進潔斎して心を司命君に向けなさい……」と言う」^{*67}とあり、茅洞が句曲の洞宮の五つの門（北通用門、東通用門、通用門、南面の東通用門、南面の西通用門）のうち、南面の西通用門に当たるとされている。

しかし、『茅山志』が茅洞を南面の西通用門とする説には疑問がつきまとう。なぜなら、『茅山志』がここに引用する定録君の言葉は、『真誥』には「大茅山にもやはり小穴が南面にあって、〔東通用門と〕そっくり同じであり、南の通用門という。やはり石で穴口を塞いでいる。ただ精進潔斎して司命君に心に向けなさい。……〈これは南面の東よりの通用門であり、きっと柏枝礪の石穴中にあるのに違いない。この礪には小穴がたいそう多いので、すぐには見分けにくい〉」^{*68}とあり、ここの陶注によると、定録君の言う大茅山の小穴は南面の東通用門を指すものとされているからである。あるいは、『茅山志』は「南面の東通用門」と書くべきところを、うっかり「南面の西通用門」と誤記してしまったのかもしれない。仮にそうだとすれば、茅洞を南面の東通用門に同定し得る可能性が出てくるが、いまのところ想像の域を出ない。

なお、陶弘景は南面の西通用門について、「〈現在の山南の大洞窟が南側の西よりの通用門である〉」^{*69}と述べているが、今回の調査を通して、この大洞窟についての手がかりを得ることはできなかった。大茅山南の大洞窟という一点にのみに注目すれば、金牛洞がそれに当たりそうにも見えるが、『茅山志』に「金牛穴は柏枝洞の東にある」と言われる柏枝洞が、柏枝礪中の洞窟のいずれかを指すとすれば、金牛穴は柏枝礪中にある南面の東通用門よりもさらに東に位置することになる。したがって、南面の西通用門が金牛洞だということはある得ないだろう。

5-4. 元陽観（※地図 3）

茅洞の小道を引き返し、うねうねと続く車道を登ってゆくと、元陽観の山門（※写真 43）に着く。ここは大茅山の山頂付近にある九霄万福宮と、東面の麓にある崇寿観の中間地点に位置しており、山の傾斜に合わせて階段状に建物が立てられている。全真教の道観である。外観は真新しく、『茅山道教志』によると、二〇〇五年に再建されたそうである。^{*70}

『茅山志』巻一七「棲観部篇」には、「元陽観は茅洞の上にある。南宋の隆興年間（一一六三～一一六四）のはじめ、呉興の道人・沈善智がそこに穴住まいし、

注 67…茅洞、在元陽觀石壇下。即南面之西便門。定録君受言、大茅山有小穴在南、謂之南便門、但精潔齋、心向於司命、……。『茅山志』巻六「括神区篇」11b)

注 68…大茅山亦有小穴在南面、相似如一、謂之南便門。亦以石填穴口。但精齋向心於司命。……〈此即南面之東便門、應在柏枝礪石穴中。此礪小穴甚多、難卒分別。〉（『真誥』巻一一12b～13a)

注 69…〈今山南大洞即是南面之西便門。〉（『真誥』巻一一6b)

注 70…楊世華／潘一德（二〇〇七）一二二頁。

みずから「洞主」と称した。後に彼が蕪王韓夫人の茅氏の知遇を得ると、彼のために殿宇が建てられた。その殿宇は、はじめ冲虚庵と名づけられたが、慶元年間（一一九五～一二〇〇）に扁額を申請して観となった」⁷¹とある。これを見る限り、元陽観と茅洞の位置関係は、現在とほぼ同じであるように思えるが、『茅山道教志』には茅洞の洞口にかつての元陽観があったと書かれている。⁷² さきほどの『茅山志』巻六「括神区篇」にも「茅洞は元陽観の石壇の下にある」とされていたことからすると、かつての元陽観は現在よりも、もう少し下側に位置していたのかもしれない。



写真 43 元陽観

注 71…元陽観、……今観在茅洞之上。隆興初、呉興道人沈善智者、穴居、自稱洞主。遇蕪王韓夫人茅氏、爲創殿宇。初名冲虚庵、慶元間請額爲観。（『茅山志』巻一七「樓観部篇」7 a）

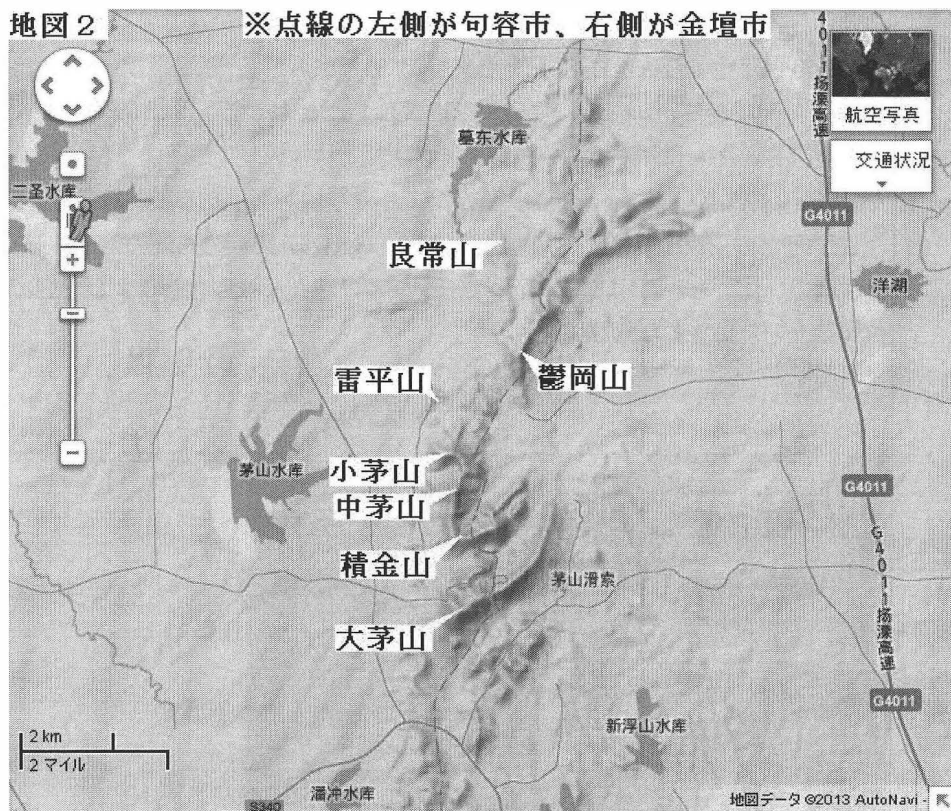
注 72…楊世華／潘一徳（二〇〇七）二七三頁。

おわりに

ここまで、とくに茅山の部分に関しては、主に茅山の現在の地理状況を『茅山志』の記述に照らし合わせ、さらにそこから『真誥』における記述へと遡らせてゆくという作業を行ってきた。この作業には不完全な部分も多いが、筆者自身としては、自分の足で、あるいは車に乗って茅山を回って、多少なりとも茅山の地理的な感覚を養うことができたように思う。この調査記録において示した写真と地図と筆者の拙い記述は、文献だけからではつかみにくい地理的な感覚を伝えることをこころみたものであるが、もしそれがわずかでも成功していれば幸いである。

ところで、筆者は、茅山と言えば、もともと楊羲と二許、陶弘景のことだけしか頭になく、この調査記録に書いたことも、大半がその範囲にとどまっているのであるが、実際に茅山に行ってみると、彼らの存在感は思ったよりも小さかった。現在の茅山からすれば、彼らは茅山の歴史上に現われた多くの神仙や道士のうちの一人に過ぎないのかもしれない。玉晨観がほとんど忘れられた存在になっているのは、そこに民家があって再建が困難だという事情があるのか

地図 2 ※点線の左側が句容市、右側が金壇市



地図 3





もしれないが、茅山の道観で彼らを祀っている場所はかなり少ない。筆者が足を運んで気づいた限りで言うと、九霄万福宮の一室に魏華存と楊義、陶弘景、張道陵、葛洪の像が祀られていただけである。

一方、茅山の道観の特徴として、ひときわ目を引いたのは、茅君信仰の盛んさである。今回の調査で訪れた道観（工事中の崇禧万寿宮は除く）と2012年8月末に訪れた九霄万福宮、崇寿観には、いずれにも三茅君を祀る大きな太元宝殿が建っていた。茅山だから三茅君を祀っているのは不思議ではないのかもしれないが、楊義と二許が茅山で活動をはじめる以前からこの地に存在していた茅君信仰が、現在も盛んに行なわれていることに、筆者は興味を覚えた。

1・2では、穹窿山における茅君信仰^{*73}の例を取り上げたが、このような信仰は江南の各地域に広がっていたようである。たとえば、筆者は以前、杭州の通玄観造像を見学したことがあるが、そこにも南宋紹興年間の三茅君のものとされる造像があった。『通玄観志』（明・姜南撰、清・呉陳琰増補）所載の「三茅殿碑記」（郁存方撰）によると、通玄観という道観は、劉真人が夢に三茅君がやって来るのを見たことを契機として建てられたものだという。^{*74} また、現在においても、たとえば茅山道院のウェブサイトリンクのある道観^{*75}を見てみると、丹徒三茅宮や蘇州小茅山道院などの名が目につく。さらに、鎮江の潤州道院では、清代のころに三茅宮が建っていたそうである。^{*76}

注 73…張超然（二〇〇七）八九～一一二頁を参照。

注 74…惟茲觀肇初、粵自南宋紹興壬午年。都録少師鹿泉劉真人修真地也。嘗夢三茅君馭白鶴往來旋繞、徘徊於茲。厥明遂見三鶴來翔。自孚兆夢、廼奏請建祠、以祠茅君。高廟因之、勅名曰通玄觀。※『江南道教碑記』を参照した。

注 75…<http://www.msdy.org/djgg/>（2013年4月30日）

注 76…<http://www.daoisms.org/article/sort022/info-8197.html>（2013年4月30日）

今回の調査に参加し、先生方とともに穹窿山や茅山を回りつつ話を聞かせていただくなかで、以上のような江南地域における過去と現在の茅君信仰の実態がどうなっているのか、筆者なりに関心を持つことができた。この調査記録には茅君信仰という観点を十分に盛り込むことはできなかったが、今後、さらに機会を見つけて、江南地域の茅君信仰やその上清宗壇との関わりなどについて調査検討してみたいと思う。

主要参考文献

- 陳世華『『瘞鶴銘』・天監井欄與陶弘景書法』『書法研究』一九八五年、第四期。
- 陳小三「蘇州林屋洞出土玉簡銘文初探」『東南文化』二〇一〇年、第四期。
- 程義「宋真宗天禧二年林屋洞道教投龍遺物簡介」『中国道教』二〇一〇年、第一期。
- 程義／姚晨辰／嚴建蔚「蘇州林屋洞出土道教遺物」『東南文化』二〇一〇年、第一期。
- 李洲芳『太湖西山』中国環境科学出版社、一九九六年。
- 『茅山乾元觀』編委会『茅山乾元觀』二〇一〇年。
- 麥谷邦夫「梁天監十八年紀年銘墓磚と天監年間の陶弘景」礪波護編『中国中世の文物』所収、京都大学人文科学研究所、一九九三年。
- 麥谷邦夫／吉川忠夫『周氏冥通記研究（訳注篇）』京都大学人文科学研究所、二〇〇三年。
- 野口鐵郎／坂出祥伸／福井文雅／山田利明編『道教事典』平河出版社、一九九四年。
- Strickmann, Michel. "On the Alchemy of T'ao Hung-ching." *Facets of Taoism: Essays in Chinese Religion*. eds. by Holmes Welch and Anna Seidel, Yale University Press, New Haven, 1979.
- 蘇州吳中區道協「道教「天下第九洞天」林屋洞靈祐觀正式對外開放」『中国道教』二〇〇五年、第六期。
- 土屋昌明「第八大洞天句曲山洞の現況と考察」『洞天福地研究』第三号、二〇一二年。
- 王京州校注『陶弘景集校注』上海古籍出版社、二〇〇九年。
- 吳垂魁編『江南道教碑記』上海辭書出版社、二〇〇七年。
- 楊世華主編『茅山道院歷代碑銘錄』上海科技術文献出版社、二〇〇〇年。
- 楊世華／潘一德『茅山道教志』華中師範大学出版社、二〇〇七年。
- 横手裕「洞庭包山林屋洞」『洞天福地研究』第二号、二〇一二年。
- 吉川忠夫／麥谷邦夫『真誥研究（訳注篇）』京都大学人文科学研究所、二〇〇〇年。
- 張超然『系譜・教法及其整合：東晉南北朝道教上清經派的基礎研究』国立政治大学中国文学系九十六学年度博士学位論文、二〇〇七年。